

留学・研究計画書

氏名 白井 順	留学機関名 ソウル大学奎章閣韓国学研究院
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2011年9月 2013年8月
研究テーマ 朝鮮古書刊行會の意義とそれをめぐる日・韓人士に関する研究—白斗鏞にも顧慮しつつ—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>日帝時代（1910年8月～1945年9月7日）の幕開けと同時に朝鮮古典籍を出版した組織として、朝鮮古書刊行會があった。明治44（1911）年10月の朝鮮群書体系第一期刊行完了の辞によれば、「朝鮮の文献保護を思い六箇年計画にて朝鮮古書刊行を企て」とあり、會評議員には千葉昌胤（奎章閣囑託）・河合弘民（東洋専門学校）・小田省吾（学部書記）・黒崎美智雄（奎章閣課長）・前間恭作（通譯官）・国分象太郎（人事局長）・浅見倫太郎・鮎貝房之進・菊池謙讓らが名を連ねている。これらの人物は、みな朝鮮研究の先駆者である。</p> <p>朝鮮古書刊行會の発足は、朝鮮古典文献を求める新しい読者が生まれたことを意味している。彼らは、李朝時代のソンビや両班とは全く異なったタイプの人々であり、この事実は韓国学にとって非常に大きな意味を有しているが、この方面に関しては韓・日ともに研究の蓄積が充分だとは言いがたい。当時の日本人による朝鮮研究はどうであったか、という問題だけでなく、新しい古典文献受容層—李能和・崔南善・孫晋泰・宋錫夏・張之兌・李仁榮などの人々—が如何に古典を捉えていたのか、という問題を現地で調査したい。実は、当時の古典文献の新たな需要層は日本人・韓国人だけではなく、欧米から派遣された宣教師たちも韓国語や文化の研究をしていた。そういうわけで、私は日本人・韓国人・宣教師たちの交流も視野に入れて調査したいと考えている。</p> <p>以上のような問題意識に立つとき、翰南書林の白斗鏞の存在は重要な意味を持つてくる。彼は多くの古典籍を出版し、前間恭作や三木栄とも交流があり、当時の人々の交流の中心に居た人物であり、ある意味ではキーパーソンだと私は考えている。彼がなぜこの時期に多くの古典籍を出版したのか、彼の学識は如何なるものであったのか、また彼はどのような人々と関係していたのか、これらの事柄に私は強い興味を抱いており、彼を通して当時の文化界・学術界の様相を解明できるのではないかと大きな期待を抱いている。</p> <p>日本屈指の朝鮮本を蔵する東洋文庫は、前間恭作の蔵書を架蔵することで知られるが、東洋文庫には翰南書林から購入した朝鮮古典籍が数多く存在する。明治末期から大正期にかけての東アジアにおける東洋学の実相を再検討する際、白斗鏞と翰南書林を除外するのはきわめて非現実的であろう。朝鮮古書刊行會と翰南書林から書物を購入し受容した人々が、創生期の東洋学を支えていたと言っても過言ではないのである。改めて強調しておきたいが、このようなテーマを設定した私の真の意図は、書物それ自体の考察にあるのではなく、一冊の書物に関わった執筆者・読者・所蔵者、それに出版人・書籍販売者の学問と人間像を考察することにある。単に日帝時代の朝鮮研究や書籍愛好家のことを調べるのではなく、東洋学とは何か、どうあるべきかと問い続けた人々とその学問を今に甦らせ、その志を未来に伝えたいのである。</p>	

成果報告書

記入日 2013 年 9 月 20 日

氏名 白井 順	留学先国名 韓国	所属機関 ソウル大学奎章閣韓国学研究院
研究テーマ： 朝鮮古書刊行会とそれをめぐる日韓人士の研究		
留学期間： 2011 年 10 月 ～ 2013 年 9 月		
	<p>【留学全般の感想】</p> <p>私が留学したソウル大学奎章閣は、朝鮮王朝時代の宮廷図書館・奎章閣を引き継いで設立された研究機関であり、韓国学研究的の拠点である。宮廷儀軌をはじめ、奎章閣にしか所蔵しない資料も多い。植民地時代の京城帝国大学時代に所管であった資料はソウル大学中央図書館にあり、文化史及び植民地時期研究をする上で、ソウル大学で研究することは非常に幸運であったと言える、</p> <p>留学期間中には、歴史調査会に参加し、地方へ探索調査に行き、歴史的建造物や名跡地を訪れた。このことは、単に韓国の歴史や地理の勉強というだけでなく、韓国の人たちの意識を知るうえで、非常に勉強になった。例えば 2012 年 10 月、対馬で国定文化財の仏像が盗まれ釜山に持ち込まれて、日本に返還されないという事件が起きているが、その仏像は、高麗時代末期（14 世紀）に瑞山の浮石寺でその仏像が作られたと言われている。「浮石寺」といえば、慶尚北道の榮州にある寺が有名であるが、韓国人でも忠清道・瑞山に浮石寺があることすら知らない。瑞山の浮石寺は 15 世紀初頭には廃寺で、そこへ行ってみれば、歴史的建造物も何もない小さな寺である。</p> <p>（上の写真；瑞山・浮石寺を象徴する境内の岩）「韓国文化財が日本にある」＝「植民地時代に略奪された」という韓国国内の意識、李明博元大統領の独島上陸をはじめ、韓国国内の社会情勢や世論などについて、長期間余裕をもって韓国社会の動きを感じることができ、日本には知り得ない考え方に接することができ、非常に良い経験になった。</p> <p>留学前半期には、午前中には語学堂へ通い、韓国語を勉強しつつ、午後には研究に没頭する日々だった。自由な立場で直に韓国の空気に触れるというのは、視野の広がりや理解の深度という点では相乗効果をもたらし、松下幸之助記念財団国際スカラシップで申請したテーマとは異なる分野（韓国陽明学・韓国術数学）でも、韓国文化研究を進めることができた。</p>	

【研究成果】

1、はじめに

朝鮮古書刊行会は、韓国併合（1910年8月29日）と同時に朝鮮古典籍を出版した組織である。朝鮮古書刊行会のメンバーについては、明治44（1911）年10月の朝鮮群書体系第一期刊行完了の辞によれば、「朝鮮の文献保護を思い六箇年計画にて朝鮮古書刊行を企て」たとあり、會評議員には千葉昌胤（奎章閣囑託）・河合弘民（東洋専門学校）・小田省吾（学部書記）・黒崎美智雄（奎章閣課長）・前間恭作（通譯官）・国分象太郎（人事局長）・浅見倫太郎・鮎貝房之進・菊池謙讓らが名を連ねている。これらの人物は、みな朝鮮研究の先駆者である。朝鮮古書刊行會の発足は、朝鮮古典文献を求める新しい読者が生まれたことを意味しており、私は研究期間内に同會評議員の前間恭作を中心に、畏友の鮎貝房之進・浅見倫太郎について、特に詳しく調べた。

2、朝鮮古書刊行会とその関係者たち

「朝鮮古書刊行会」が創設されるまでの日本人の朝鮮研究について、まず明治32年に朝鮮會（朝鮮月報社；古田楯雄）が挙げられる。ここで前間恭作や鮎貝房之進が論考を発表している。このあと、前間恭作はシドニーへ転勤となるが、前間がいない間、明治35年には前間と同郷の同僚・国分象太郎や幣原坦・鮎貝らは韓国研究会⁽¹⁾を開催している。前間恭作が再び京城勤務となり、彼は明治42年『韓語通』の出版を機に朝鮮語研究会を立ち上げ、鮎貝房之進の邸宅で、アンダーウッド・ゲール・ドマンジュ等欧米宣教師、そして韓国のハングル研究第一人者であった周時経とともに半年間韓国語研究活動をしていた。この事に就いては、拙稿「前間恭作と鮎貝房之進の交流」（『年報朝鮮学』第15号、2013年2月）を参照頂きたい。

朝鮮古書刊行会の研究活動の萌芽というべきものが「韓国珍書刊行会」である。明治39年2月25日『朝日新聞』には會員募集の広告があり、「會費一年十三円、二カ年を以て終結す毎年五百頁以上の書籍三冊以上を配布」と記してある。明治39（1906）年3月15日『韓半島』2巻1号によればその概略は、「京城学堂長渡瀬常吉氏等の発起にて韓国の珍書を出版する為韓国珍書刊行会を設立し国分書記官其他知名の賛成あり幣原博士会長となり愈いよ京城学堂内に設けられたり同會の刊行すべき図書は概略一、未だ世に公もせざる各種の有益なる珍書、一嘗て刊行したる珍書にして今日殆ど絶版の姿に歸したるもの、一日清韓三国に関する資料其他歴史文学地理法制伝記文集等に関する有益なる図書にして會員は二百名として一期分（六箇月）金六円五十銭とし一箇年三回発行する予定なり尚同會員たらんとする人は京城学堂に就て照合せらるべし」とある。また1906年2月17日（光武10年2月17日）の『皇城新聞』の記事によれば、「評議員は 國分象太郎・鹽川一太郎・前間恭作・大浦茂彦・田中玄黄・鮎貝房之進・菊池謙讓等諸氏」とあり、幣原坦が会長、理事に西河通徹・高橋亨と記してある。この事業に関わった日本人メンバーの殆どが「朝鮮古書刊行会」の評議員を務めており、朝鮮古書刊行会発足の胎動だと言っても過言ではないだろう。

明治42年8月、『朝鮮』第3巻6号「朝鮮珍書刊行の発表」の記事には「朝鮮本の流布少きため非常に高価にして容易に手に入り難きを憂ひ今回本社内に朝鮮珍書刊行部を設け歴史制度地理文学等に関する珍書奇籍を陸續発行すべき計画なるを以て細則は次号に発表する事とせり」とある。同巻には明治42年8月1日付で「本社の朝鮮珍書刊行計画」の広告も掲載し、10月「朝鮮古書刊行会」は朝鮮雜誌社内に「朝鮮研究者の便利と朝鮮古文明紹介の一助として」設けられ、「朝鮮の古書珍本を廉価に頒たんと計画」で、三期に分けて

毎月一冊刊行した。第一期明治42年10月～明治44年9月までの二年間、第二期明治44年11月より大正2年10月までの二年間、第三期大正2年11月より大正4年10月までの二年間。そしてこのあと、別集という形で第四期（大正4年11月～大正6年10月）『退溪集』・『栗谷集』・『陽村集』・『三峯集』・『朝鮮史』を刊行していく。特筆すべき事業としては、明治44年10月に刊行した『朝鮮古書目録』が挙げられる。これは総督府・李王家の蔵書以外に、当時目録の基本とされたクーランの朝鮮書籍解題、外国語学校京城支部発行の韓籍目録を土台に、朝鮮図書刊行会の評議員である幣原・前間・浅見・河合ら私蔵の図書を含めた朝鮮古典籍総目録である。この巻頭に総序を記した浅見倫太郎は、明治42年9月に「高麗時代の活版事蹟」、同43年4月「韓人の著作に就いて」を記すだけでなく、朝鮮古書刊行会の『三国史記』・『大東野乗』巻頭解題を書いており、事業に大きく関わっていた人物である。その他、評議員を務めた韓国学研究者に関しては『朝鮮及満洲』にその一端が記してあるので、紙幅の関係上、ここでは割愛する⁽²⁾。

朝鮮雑誌社の朝鮮古書刊行会幹事・積尾春苧は東洋大学卒業後、明治33年に渡鮮し釜山で教師をし、新聞事業で失敗した後、同41年に京城で朝鮮雑誌社を立ち上げ『雑誌朝鮮』（のちに『朝鮮及満洲』）を発行した。国学院出身で、『国学者伝記集成』を記した大川茂雄も同社に入社し、専門の儒学知識を活かして、『朝鮮』（第4巻1号、2号）誌上に朝鮮古書刊行会で出版した書の解題を記した。

3、朝鮮古書刊行会とその読者たち

朝鮮古書刊行会の活動と並行するように、明治43年11月青柳南冥・大村友之丞は朝鮮研究会を立ち上げた。朝鮮研究会に就いては⁽³⁾先論があり、評議員は重なる人物が多いものの、朝鮮古書刊行会とはコンセプトが違っていた。積尾と青柳南冥は畏友で、朝鮮研究会も独自に漢文和訳対照の古典叢書を刊行し、後にこれらは朝鮮研究会本と呼ばれる。大正5年に朝鮮研究会が発行した『新朝鮮』に、積尾は自らの事業に関して「朝鮮古書刊行事業は一部少数の学究には非常に感謝される所なるも、一般の社会には余り歓迎されざる事業なり、又近時朝鮮に対する興味薄らぎ、朝鮮に関する出版物の需用は極めて狭小なり」と述べる。浅見倫太郎は「朝鮮古書刊行事業より見たる積尾君」と題し、次のように述べる。

「朝鮮雑誌社」の古書刊行は年を経ること満六箇年『大東野乗』のみにてても五十五種其の他『三国史記』を数ふれば約百種にして七十余冊を算するに至った『大東野乗』なる随筆所謂朝鮮の野史なるものは元と朝鮮に二部外なかったのを一部は佛蘭西人が買ひ、一部は露西亞人が買うと云ふことで、一部も朝鮮に無くなってしまうので朝鮮人が俄に騒ぎ出して大急ぎで謄写した、夫れは全八十余冊八百円で故曾彌統監が買ひ上げられたのである、夫れを又貴社が曾彌さんから借りて又謄写して翻刻したので、実に古今の珍書と言って良い、併し彼れは今より二三百年前の随筆許りで夫れ以前の随筆がないから更に続野乗、続々野乗の翻刻を要するのである…」⁽⁴⁾。

青柳南冥の朝鮮研究会とは別に、明治41年（1908）11月に、河合弘民が教頭を務める東洋協会専門学校で朝鮮研究会が創設された。11月8日に第1回例会を開催し、毎月第二日曜（午後6時）に研究講演を行い、論考を『朝鮮』誌上に掲載した。この朝鮮研究会で、浅見・積尾は幹事を務め、韓籍謄写事業も行っており、第一回配本は『燃黎室記述二巻』、第二回配本は『傭齋叢話』であった。これがまさに朝鮮古書刊行会の前身である。このような朝鮮での歴史文化研究に対する関心は、総督府の事業『朝鮮図書解題』にも大きく関係している。奎章閣所蔵『大正二年以降 朝鮮図書解題二関スル書類』（26792）には、朝鮮古書刊行会評議員を務めた千葉昌胤と鄭万朝の名が記されている。このように、朝鮮古書刊行会が在鮮の数少ない日本人研究者のためのみならず、韓国人にとっても価値ある事業であった。

日本人による韓国文化研究への探求は、韓国人にとっては自己の文明の再認識となっていく。まず挙げられるのは独立宣言を起草した崔南善である。崔南善は朝鮮光文会を立ち上げ、古典書を出版したが、前間も光文会会員であったことが、今回の調査で明らかになった。また朝鮮民俗研究の先駆者・孫晋泰は創設当初の東洋文庫に勤めながら、前間の指導を受け浅見が所蔵する朝鮮古歌謡を書き写し（現在ソウル大学所蔵）、『朝鮮古歌謡集』を執筆した。この事の詳細については、拙稿「前間恭作と孫晋泰」（『近代書誌』第4号、2011年12月）を参照されたい。また明治に活躍した文筆家・渋川玄耳も朝鮮古書刊行会本の読者で⁽⁵⁾、内地に朝鮮文化を紹介する役割を果たしている。しかしながら、日本国内では入手困難であったため、朝鮮語学研究者・金沢庄三郎は大正7年に京城に赴いた際に、朝鮮古書刊行会本を購入したことが今回の調査によってわかった。また京城帝国大学創立と同時に着任した朝鮮語学者・小倉進平も前間恭作との交流を通して、研究を進めており、この事に就いては拙稿「書簡を通して見た前間恭作と小倉進平の交流—『郷歌及び吏詠の研究』刊行の昭和四年を中心に—」を参照されたい。

4、まとめ

現在、浅見の蔵書はカルフォルニア大、幣原・前間の蔵書は東洋文庫、河合の蔵書は京都大学が所蔵し、朝鮮古書刊行会評議員が蒐集・家蔵した蔵書が韓国学の根柢を支えているとも言える。浅見倫太郎は、帰国後、宮内省で李王家実録の編纂に関わり、李熹・李垞・李太王の実録を編纂した。第一期刊行後の明治45年6月1日『朝鮮』の「風聞駄語」に、朝鮮雑誌社の釈尾春菴は前間について、次のように記している。

「朝鮮通の前間去年去り、今又塩川も不平を抱て朝鮮を去った、而して三十年来日韓外交に於ける唯一の通訳にして日韓併合談判の通訳も勤め日韓関係 史上の功労者たる国分も中枢院書記官と言ふ隠居役に逐ひ込められた、朝鮮統治の大業は是から初まるのに、今から朝鮮通をどしどし追い払ってハイカラ役人計りを得顔になっては朝鮮の前途が思ひやらると心配して居った者がある」。

明治40年10月に東洋協会専門学校京城分校の教頭として赴任し、鮎貝らとともに韓国研究を盛り立てた河合弘民は、大正4年には本校教授として帰国し、同7年10月12日に享年47で逝去する。明治39年以来、前間とともに朝鮮文化研究に従事し、大正5年には出土資料調査にも尽力した浅見も大正7年3月に突然辞職し、帰国後は前間とともに在野で朝鮮文化研究を続けていた。前間と浅見の交流については、現在論文を執筆中である。

今回の調査は、前間恭作を中心として、鮎貝・浅見・小倉進平といった朝鮮学先駆者が、朝鮮古書刊行会とどのようにかかわっていたのか、という点に重点を置いたものである。朝鮮古書刊行会そのものの資料については、不明な事が多く、未だ解明できないことばかりであるが、彼らの学問的事業・功績は、今に至るまで、韓国文化研究の基礎となっていることは、疑いのない事実である。

【注】

(1) 『韓国研究会談話録』を参照。明治37年1月3日『韓半島』1巻2号には「談話録第3号以後は其発行を廃し爾後の談話は韓半島誌上へ登載することに協議確定したり」とある。

(2) 『朝鮮及満洲』第75号「総督府の人物—其の五」、同誌第85号「総督府の人物—学者らしき人」、及び『朝鮮』第3巻1号「人物評判記」

(3) 禹快濟「伝統文化の理解と韓日両国関係—朝鮮研究会の古書珍書刊行を中心に—」

(4) 大正4年（1915）11月1日『朝鮮及満洲』（第100号）

(5) 1910年2月17日『朝日新聞』椋十「弱虫日記(6)」